

**『シュープラー・コラール集・Schublerschen Chorale fur Orgel, BWV645~650』
『二つの手鍵盤と足鍵盤を持つオルガンで演奏すべき
種々の様式による六つのコラール』**

高田重孝

正式な題名は『二つの手鍵盤と足鍵盤を持つオルガンで演奏すべき種々の様式による六つのコラール』。ヨハン・セバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach 1685~1750) が 1748 年~1749 年頃 (64 歳) に出版した『6 曲のオルガン・コラール集』で、出版譜の発行者ヨハン・ゲオルク・シュープラー氏の名前に因んで『シュープラー・コラール集・Schublerschen Chorale fur Orgel, BWV645~650』と呼ばれている。

曲集の背景

オルガン曲集として 3 声または 4 声で作曲されていて、演奏の難易度は中級程度を対象とされている。6 曲ともバッハ自身が作曲した教会カンタータの中からコラールの旋律は転用されていて、その旋律をオルガンのために編曲し直したオルガンのための曲集である。転用にあたっては、教会カンタータからの調性は変えていない。しかし第 2 番目の『我はどこへ逃れゆきて・Wo sol lich fliehen him.』(BWV646) の原曲である教会カンタータは失われていて、原曲がどのようなカンタータであったかは不明でわかっていない。

- 1、目覚めよと呼ばわる物見の声・Wachet auf,ruft uns die Stimme . BWV645
教会カンタータ 140 番 BWV 140
- 2、我はどこへ逃れゆきて・Wo sol lich fliehen him. BWV646
愛する主よ、恐れをとり・Auf meinen lieben Gott
(失われた不明の教会カンタータより)
- 3、愛する神にのみ、全てを委ねて・Wer nur den lieben Gott läßt walten . BWV647
教会カンタータ 93 番 BWV 93
- 4、わが魂は主をあがめる Meine Seel erhebt den Herren. BWV648
教会カンタータ 10 番 BWV 10
- 5、主よわれとともに宿りたまえ Ach bleib bei uns . BWV649
教会カンタータ 6 番 BWV 6
- 6、主を褒めまつれ Kommst du nun,Jesu, vom Himmel herunter auf Erden. BWV 650
教会カンタータ 137 番 BWV 137

成立時期は正確には解っていないが、表題に続く奥付けに「発行元:ライプツィヒ楽長バッハ氏、ベルリンとハレのバッハ氏の息子、ツェラの発行者」とあり、ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハがハレに就職した 1746 年 (61 歳) 以降に編纂されたことが判明している。また、1747 年 9 月にシュープラーが出版した『音楽の捧げもの』(BWV1079) よりも製版・印刷技術が向上していることから 1748 年~1749 年頃 (64 歳) に出版されたと推定されている。

コラール曲目解説

1、目覚めよと呼ばわる物見の声・Wachet auf, ruft uns die Stimme . BWV645

原コラールは作詞作曲共 フィリップ・ニコライ (Philipp Nicolai 1556~1608)

フィリップ・ニコライ (Philipp Nicolai 1556~1608) はルター派の牧師の息子としてメンゲリングハウゼン (Meninghausen) に生まれた。エルフルト (Erfurt) 大学及びヴィッテンベルク (Wittenberg) 大学を卒業。父の後を継いでルター派の牧師となり、ヘルデッケその他の教会を牧したが、当時の宗教戦争後の教派的闘争の影響を受けて、カトリック教会、及びカルヴァン派から悩まされた。ルター派の牧師としてルター派の援護のために多くの論争的文書を書いている。1596 年、ウエストファーレンのウンナ (Unna, Westfalen) 教会に赴任、1597~98 年に掛けて同地方にペストが大流行して死者が続出、毎日数十人の葬儀を執り行わなければならなかった。この時ニコライが作詞作曲した歌が “Wachet auf, ruft uns die Stimmen” 及び “Wie schon leuchtet der Morgenstern” であり、翌年 1599 年ハンプルグにおいて出版した『Freudenspiegel des ewigen Lebens・永遠の生命の喜びの鏡』の補遺にこの 2 曲を収めた。上記の序文に、ニコライは教会で毎日多くの葬式を出しているとき、死と永世を思い、アウグスチヌスの『神国論』を読んで慰めを受けたと述べている。初めの 2 行は、中世の予情詩の一形式であった「夜警歌・Wachter-lieder」を模したものだが、それが当時の人々の親しみを勝ち得て驚くほど速く普及して、ドイツの讃美歌史上、不動の地位を獲得した。

目覚めよと呼ばわる物見の声 “Wachet auf, ruft uns die Stimmen” (讃美歌 174 番) は『コラールの王・Der König der Chorale』と称され、妙に麗しきかな “Wie schon leuchtet der Morgenstern” (讃美歌 346 番) は『コラールの女王・Die Königin der Chorale』と呼ばれている。

オルガン曲は、変ホ長調『E Major』、4/4 拍子。

原曲の教会カンタータ 140 番・BWV140 は、1731 年 11 月 25 日の三位一体節後第 27 主日礼拝で初演された。原曲はカンタータ 140 番の第 4 曲『テノールのアリア』。弦楽器のユニゾンが反復する伴奏主題にテノールの歌うコラールの旋律主題が挿入されている名曲。

オルガン曲『シュープラー・コラール集』では右手に弦楽器のユニゾン、左手にテノールの旋律主題、ペダルに通奏低音を移し替えている。このオルガン編曲は原曲以上に好まれていて、様々な楽器に移し変えて演奏される。

J・S・Bach, 389 Choralgränge 329 番。

讃美歌 21 230 番。讃美歌 174 番。ルーテル教会讃美歌 137 番。聖公会聖歌集 58 番。

バプテスト教会新生讃美歌 257 番。SDA 希望の讃美歌 428 番。(歌詞・高田重孝訳)

2、我はどこへ逃れゆきて・Wo sol lich fliehen him. BWV646

愛する主よ、恐れをとり・Auf meinen lieben Gott

我はどこへ逃れゆきて・Wo sol lich fliehen him

原詩はヨハン・ヘールマン (Johann Heermann 1585 ~ 1647) 作詞(1630 年)、

原旋律の作曲者は不明(1627 年)

愛する主よ、恐れをとり・Auf meinen lieben Gott

原詩の作詞者は不明。1603 年の讃美歌集に収録された。

作曲はヨハン・ヘルマン・シャイン (Johann Hermann Schein) (1627 年)

原詩はヨハン・ヘールマン (Johann Heermann 1585 ~ 1647)

我はどこへ逃れゆきて・Wo sol lich fliehen him の作詞者。

ヨハン・ヘールマンは 1585 年、シュレジアの寒村ラウテンに生まれた。シュレジア地方は現ポーランドがドイツとチェコと国境を接するオーデル川上流周辺にある。ヘールマンが生まれた時、両親はすでに 4 人の子供を失っていて、ヘールマンが 5 歳の時、重い病気で危険な状態に陥った。その時母は神に祈り、息子ヨハンが回復したら神にささげることがを誓った。息子は回復して、両親は神に約束したとうり、息子ヨハンのために必死で働き金を工面して学校に行かせた。12 歳の時ヘールマンはヴォーラウの町の薬局で働きながらラテン語学校に通い始めた。生来体が弱かったヘールマンは体調を崩して郷里に戻り、その後は独学で学びを続けた。

17 歳になって健康が回復したヘールマンは、シュレジアのフラウシュタット (現ポーランド Wshowa) で、ルター派の著名な牧師であり詩人であったヴァレリウス・ヘルベルガー (Valerius Herberger・1562 ~ 1627) 家の家庭教師兼牧師秘書になった。優れた牧会者であり詩人であるヘルベルガーの基で青年時代を過ごしたヘールマンは、ヘルベルガーから多大な影響を受けた。ヘルベルガーの勧めによりヘールマンはシュレジアの首都ブレスウラ、さらにブリーグのギムナジウムで学びを続け 22 歳で卒業した。この時期にヘールマンの傑出した詩作の才能が認められ、1608 年・23 歳で皇帝ルドルフ 2 世によって宮廷桂冠詩人に任じられ、ブリーグの宮廷の領主や参事官たちの前で詩を朗読する榮譽に浴した。1609 年・24 歳、ストラスブール大学に入学したが、目の病のために 1 年で退学した。1611 年・26 歳、ケーベンの牧師補として招聘され、翌年 1612 年・27 歳の時、牧師として按手され、ヘールマンは言葉においても信仰においても力ある説教者となっていた。牧師就任の年に、ヘールマンは郷里の市長の娘ドロテアと結婚。桂冠詩人としても牧師としても有能なヘールマンは人々から愛される牧師となり、ヘールマンの教会と牧師館が当時の詩人たち、また思想家たちの集まる場所になっていた。1613 年・28 歳の年、シュレジア全土をペストが襲い、多くの有能な人々の命が失われた。3 年後の 1616 年、ケーベンの町が大火によって多くの建物が灰燼に帰した。1617 年・32 歳の年、深く愛していた妻ドロテアが死去。5 年間の短い結婚生活だった。

ヘールマンは愛する妻を失った深い悲しみと孤独から逃れるためか、すぐに再婚している。2 番目の妻アンナとの間には 4 人の子供に恵まれている。この頃から生来病弱だったヘールマンの体調が思わしくなくなり、気管支喘息に苦しめられるようになる。年を取るにしたがって現代で言う痛風・リュウマチによる激痛が起こるようになり、1634 年・49 歳の時には説教ができなくなり、ヘールマンが書いた説教原稿を牧師補が代読するようになった。

30 年戦争は断続的に続いていた。1622 年～23 年（ヘールマン 37～38 歳）皇帝軍の無法者の集団が町を占拠して略奪を繰り返した。1629 年（ヘールマン 44 歳）リヒテンシュタインの騎兵隊が町を占領、プロテスタント信徒の家に押し入り、主人が改宗するまで家を占領し続けた。1631 年（ヘールマン 46 歳）再びペストが襲い、千人を数えた住民の半数の 500 人が命を奪われた。1632 年（ヘールマン 47 歳）ヴァレンシュタイン軍が町を占領、残った財産の全てを奪っていった。ヘールマンの時代、死はいつも隣り合わせだった。彼はこのような過酷な生涯の中で多くの説教集や黙想集を出版したが、戦禍と病苦の中で生み出された言葉は、同じ時代同様の苦しみに合っている人々に広く読まれて愛読され、人々に多くの慰めを与え続けていた。ヘールマンは生涯に 400 曲の讃美歌を作った。彼の代表作が『O Gott, du frommer Gott・真の神は恵みの源』（讃美歌 21 545 番）である。この讃美歌は 1630 年『敬虔なる心の音楽・家庭と心の歌・Devoti Musica Cordis. Hauss-und Hertz- Musica』（Breslau, 1630）に発表された。最初は別な旋律が付けられて歌われていたが、1648 年に Braunschweig で刊行された『新公式讃美歌集 New ordentlich Gesangbuch』に現在の格調高く荘厳な旋律付けられて広く歌われるようになった。原旋律の作曲者は不明。

J・S・Bach がコラール・パルティータ BWV767 で主旋律に使用している。

1634 年・53 歳の時、医者から転地療養を勧められケーベンを離れてポーランドのリサ（現レシュノ）へ移った。苦難ばかりの人生だったヘールマンにとって、アンナとの間に生まれた長男・サミュエルは大きな希望だった。サミュエルは一時期カトリック教会のイエズス会に改宗すると言って父を深く悲しませ悩ませたが、最終的にはルター派に留まり大学で学び卒業した。父の才能を受け継いだサミュエルは、父同様に詩作の才能に優れ、皇帝より桂冠詩人の称号を授けられた。しかし、サミュエルは父同様に病弱な体質も受け継いでしまい、若干 22 歳で死去してしまった。父ヘールマンの悲しみと絶望は旧約聖書のヨブの悲しみと同じである。

最晩年のヘールマンは痛風とリュウマチの激痛に苦しまれながら、立つことも座ることもできず、いつも壁に寄り掛かっていた。夜も痛みで熟睡することができない辛い毎日を送った。病との壮絶な戦いの中でもヘールマンは神への信頼を決して失わなかった。

1647 年 2 月 17 日、62 歳になる少し前に、苦難に満ちたこの世での生涯を終えた。後世の人々はヘールマンの苦難に満ちた生涯と彼の揺るぎ無い信仰を思い尊敬の念を持って『シュレジアのヨブ』と呼んでいる。

ヘールマンはマルチン・ルター（Martin Luther 1483~1546）からパウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607~1676）への転換期に位置している。

マルチン・ルター（Martin Luther 1483~1546）の讃美歌は、1500年始めの宗教改革初期の讃美歌であり教会の公同性を重んじ、個人的な宗教感情の表出を厳しく抑制した。宗教改革当時の讃美歌は、教会の確立化や教理思想の表現に重点が置かれていた。

ヨハン・ヘールマン（Johann Heermann 1585~1647）は時代的にもパウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607~1676）への橋渡しの時代にあたる。ヘールマンの時代から讃美歌は徐々に教会の教理信条を歌うことから脱却して、個人の主観的信仰を歌うもの、敬虔主義的な傾向を帯びようになり『信仰告白の歌』から『信心の歌』へと変わって行き、言葉の使用法も『我ら』から『わたし』もしくは『われ』を主体とした歌に移行し始めた時代だった。

パウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607~1676）の時代になると、宗教改革（1517年）より100年後の讃美歌は宗教改革当時とは違った、個人の思想の表現や感情の表現が歌われるようになった。100年も経つと、教会の公同性よりも個人的な宗教感情表現が宗教詩として定着して、イエスへの愛を直接的に歌う『イエスの歌・Jesuslied』として、より会衆に親しまれ愛され好まれるようになった。その点でもこの讃美歌は1600年代の讃美歌の特徴を良く表わしている。

バッハのコラール集（J・S・Bach, 389 Choralgrsange）25~29番には『**愛する主よ、恐れをとり・Auf meinen lieben Gott**』の題でのみ、5種類のコラールが編曲されている。作曲は**ヨハン・ヘルマン・シャイン（Johann Hermann Schein）**（1627年刊行）

シュープラー・コラール集には『**我はどこへ逃れゆきて・Wo sol lich fliehen him**』の題で掲載されている。原曲作曲者は不明。

原曲は失われた不明のカンタータと推定されている。オルガン曲はホ短調（E minor）4/4拍子。『シュープラー・コラール集』ではコラールの旋律はペダルに置かれて歌われている。右手の伴奏主題を常に左手が追従するカノン様式の中にコラールの旋律が表れる。

J・S・Bach 『教会カンタータ、5番、89番、136番、148番、163番、199番』
コラール編曲、694 .

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 25~29番。（歌詞・高田重孝訳）
讃美歌21には採用されていない。

3、愛する神にのみ、全てを委ねて・Wer nur den lieben Gott läßt walten. BWV647

原曲は宗教詩のみならず作曲もしたG,ノイマルク（Georg Neumaruk 1621~1681）の讃美歌。ノイマルクはチューニンゲン地方のランゲンザルツァに生まれ、ケーニッヒベルクで法律を学

び、有名な S,ダッハの芸術サークルに属した。ワイマールの図書館司書を務め、宮廷詩人であるばかりか、ピオラ・ダ・ガンバ奏者としても有名だった。この曲は 1657 年に『その重荷を主にゆだねる者を主は豊かに支えてくださる』という言葉に基づく慰めの歌の題で発表された。原曲は 4/6 拍子で繰り返される短調の旋律が、平行調に転調した後、また原調の短調に戻る哀愁を帯びた美しい旋律を持っている。バッハはこの漂うような旋律を均等な 4 分音符にして、堅固に構築した旋律に整え、さらに第 5, 6 フレーズの旋律を変更して讃美歌にした。

原曲の 4/6 拍子から、均等な 4 拍子へのリズムへの変更は、下声の 3 声部のモチーフの展開を意識した結果と思われる。2 つの 32 分音符を含むモチーフは、すでに BWV616『平安と安らぎ、御言葉のとおり』・Mit Fried und Freud ich fahr dahin』有名な『シメオンの讃歌・Nunc dimittis』と呼ばれる聖句に基づく讃美歌の編曲に現われているが、讃美歌の主題が違うために、この讃美歌では同じ 32 分音符でも性格が全く違う使い方がされている。BWV616『シメオンの讃歌』では『救い主、幼子イエスに会うことのできた喜びと、預言された通りに、静かにこの世を去る喜び』とが表現されているが、この讃美歌の編曲では『人生での激しさという立ちの中にある、神に対する堅い信仰と信頼による慰め』が表現されている。

バッハ自身、この旋律をことのほか好んで教会カンタータ 93 番の主題に使用している。その他、カンタータ 27 番第 1 曲、84 番第 5 曲、88 番第 7 曲、166 番第 6 曲、179 番第 6 曲、197 番第 10 曲に使用している。

バッハは当初の『コラール前奏曲集』の 113 番、『十字架と迫害』の中に組み込む計画でいたが、実際は『コラール小曲集』の 43 番に置き換えている。

また、後のオルガンのための『シュープラー・コラール集』の第 3 曲でも、この旋律を主題として使用している。原曲は『教会カンタータ 93 番 BWV93』の第 4 曲。ソプラノとアルトの二重唱。原曲のカンタータ 93 番では、ソプラノとアルトが途切れることなく旋律を掛け合いながら歌い、要所で弦楽器がユニゾンでコラールの旋律を挿入している。つまり、第 1 曲とは逆に、二重唱が旋律を支配している。オルガンのために編曲された『シュープラー・コラール集』では右手にソプラノ、左手にアルト、ペダルにコラールの旋律が割り振られている。

ハ短調 (C minor) 4/4 拍子。

J・S・Bach 『教会カンタータ、21 番、27 番 84 番、88 番、93 番、166 番、197 番』

コラール編曲、690, 691. 4 声コラール、BWV 434.

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 369 番

J・S・Bach, 389 Choralgränge 367 ~ 373 番。

讃美歌 21 454 番。讃美歌 304 番。ルーテル教会讃美歌 324 番。

バプテスト教会新生讃美歌 434 番。 (歌詞・高田重孝訳)

4、わが魂は主をあがめる Meine Seel erhebt den Herren. BWV648

原曲コラールはグレゴリオ聖歌の『マニフィカート・Magnificat』

現在のグレゴリオ聖歌集: Graduale Triplex・グラドゥアーレ・トリプレクス、ソレム出版 1979 年、『Magnificat 207～218 頁』ではこの旋律は確認されない。おそらく、1500 年代のドイツのカトリック教会ではマニフカートがこの旋律で歌われていて、1527 年の宗教改革を経てルター派では同じ旋律のマニフィカートが歌われていたのであろう。

ドイツ語訳はラテン語より 1529 年以前(おそらく宗教改革の時 1527 年前後)に訳された。

カルヴァン派聖歌集より転用 1594 年。

ルカによる福音書 1 章 46～55 節による『マリアの讃歌・Magnificat』

『わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう。力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。そのみ名はきよく、そのあわれみは、代々限りなく、主をかしこみ恐れる者に及びます。主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ、飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさい。主は、あわれみをお忘れにならず、その僕(しもべ)イスラエルを助けてくださいました。わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とをとこしえにあわれむと約束なさったとおりに。』

宗教改革初期にセドゥリウスの有名な『キリスト讃歌』をルターが、ラテン語から自国語のドイツ語に翻訳して、当時のままの単旋律聖歌の旋律で、ルター派の讃美歌の中に取り込んでいった。この様な手法は、初期の宗教改革の讃美歌創作期において良く採られた。カトリック教会から改宗したルター派の人たちが良く熟知している単旋律聖歌の旋律にラテン語の歌詞の内容をよりよく理解できるように、自国のドイツ語に変えて讃美した。この讃美歌は 1524 年には出版されている。『マリアの讃歌・Magnificat』も同じ手法で、当時ドイツで歌われていて人々に良く熟知されていたグレゴリオ聖歌の旋律をコラールの旋律として用いたと考えられる。

1724 年 7 月 2 日 聖母マリアのエリザベス訪問日礼拝で初演された『教会カンタータ 10 番・BWV10』の第 5 曲のアルトとテノールの二重唱の転用。二重唱が伴奏の役目を担い、トランペット(改訂稿ではオーボエ)がコラール旋律を挿入している。

オルガン曲『シュープラー・コラール集』では、高音楽器のトランペットを模して右手でコラール旋律が演奏されている。従って伴奏の左手とペダルが低音に偏っていて、『シュープラー・コラール集』の中では異色の渋さが際立っている。

J・S・Bach, 『教会カンタータ、10 番』『マニフィカート、BWV243, 歌詞・ラテン語』
コラール編曲、733 . 4 声コラール集、BWV 324,

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 121、122 番。(歌詞・高田重孝訳)
讃美歌 21 には採用されていない。

5、主よわれとともに宿りたまえ Ach bleib bei uns. BWV649

原コラールはラテン語聖歌 Christe qui lux es et dies

ドイツ語訳はフィリップ・メランヒトン (Philipp Melanchthon 1497 ~ 1563) (1579 年刊行)

1725 年 4 月 2 日、復活祭 2 日目の礼拝で初演された『教会カンタータ 6 番・BWV6』の第 3 曲のソプラノのアリア。チェロの通奏低音の上にピッコロの装飾された細かいパッセージが伴奏にあり、ソプラノによりコラールが美しく挿入されている。

オルガン曲『シュープラー・コラール集』では、チェロの通奏低音が左手に高く移し替えてあり、カンタータ 6 番で見たチェロの通奏低音に有った陰りが解消されていて、違う雰囲気を感じられる。カンタータの 2/2 拍子から 4/4 拍子に拍子に変更されていて、より整えられた形に編曲されている。カンタータにある繰り返し (Refrain) も抹消されていて、最も変更点が多いオルガン曲に編曲されている。変口長調 (B Major) 4/4 拍子。

J・S・Bach, 『教会カンタータ、6 番』

4 声コラール集、BWV 253.

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 1 番。(歌詞・高田重孝訳)

讃美歌 21 には採用されていない。

6、主を褒めまつれ Kommst du nun, Jesu, vom Himmel herunter auf Erden. BWV 650

原詩はヨアヒム・ネアンダー (Joachim Neander 1650~1680)

原旋律作者は不明。おそらく古いドイツ民謡からの転用と考えられている。原旋律が初めて公刊されたのは 1665 年版 Stralsund Gesangbuch(シュトゥラルズント聖歌集・Ander Theil des ernuerten Gesangbuch, 2, Aufl. Stralsund, 1665)に収録された。ヨハン・クリューガー (Johann Cruger 1598 ~ 1662) が、1668 年に刊行した Praxis Pietatis Melica に収録して以来、あらゆるドイツ・コラール集に掲載されるようになり、旋律の荘厳さと響きが歌詞と相俟って人々に愛され歌われるようになった。

原詩のヨアヒム・ネアンダー (Joachim Neander 1650~1680) は北ドイツのブレーメンで生まれた。ネアンダーの先祖はノイマン (Neumann) という宗教改革時代からの牧師の家系で、ヨアヒムの曾々祖父ヨアヒム・ノイマン (Joachim Neumann) は 1555 年にスターデの牧師となった有名な説教家で、ルターの協力者メランヒトンが彼のために推薦状を書いている。曾祖

父も、祖父も同じヨアヒムと言う名前を持ちルター派の牧師を務めた。祖父の代にノイマン（Neumann）からギリシャ風なネアンダー（Neander）と言う名前に改名した。祖父の子、ヨアヒムの父、ヨハン（Johann Neander）は教師となりブレーメンに移り住んだ。

ヨアヒムは少年時代をブレーメンで過ごし、父が教師をしている学校で学んだ後、ブレーメンの大学（ギムナジウムイルストレ）に進学したヨアヒムはそこで『カルヴァン改革派コクツェーユスの契約神学』を熱心に学んだ。ここで学んだ思想は彼の讃美歌にも反映されていて、後に出版された讃美歌集が『契約の歌・Bundes-Lieder』と名付けられている。

大学卒業の年にブレーメンに着任したばかりの改革派敬虔主義の牧師ウンダーアイクの説教を聞き回心して、ルター派から敬虔主義派（改革派）へと思想的に変わって行った。ウンダーアイク牧師はヨアヒムの信仰の父、指導者となっていった。ブレーメンからハイデルベルクへ移り住んで家庭教師をしながら神学を学び続け、23歳の時にフランクフルトの改革派教会で牧師補として実習を積んだ。フランクフルトには敬虔主義の父と称されるフィリップ・ヤコブ・シュペーナーが牧師としてルター派の教会の責任を持っていた。思想的指導者ウンダーアイクと同世代のシュペーナーの主催する『敬虔の集い・コレギア・ピエターティス』に参加し始め、その集会でネアンダーの作った讃美歌が歌われるようになった。当時、鋭い対立関係にあったカルヴァン改革派とルター派が敬虔主義と言う思想によって共通点を見出し、両派の信者が共に讃美を捧げる機会と場所があったことは驚きに値する。

ドイツの敬虔主義は1600年から1700年にかけて教会内部の正統主義の教条化、信仰の平易化に対して起きた改革運動で、生き生きとした信仰、行動に表われる敬虔、禁欲、情動的宗教性を重んじる思想だった。敬虔主義運動はルター派とカルヴァン改革派内部で起こった運動であったが、ルター派、カルヴァン派、両教会組織と距離を置いた運動であったから、しばしば両教会当局との間に誤解による摩擦が起きて、両教会当局から敬虔主義思想は問題視されていた。特にラバディなど分裂派敬虔主義者の影響でネアンダーの時代のカルヴァン改革派教会は、この敬虔主義運動が改革派教会を分裂に導くと考えて危機感を強く抱き危険視していた。

24歳のネアンダーがデュッセルドルフの改革派教会（当時はまだ教会堂は建ってなかった）付属のラテン語学校校長として赴任した時代はまさにそういう時代の最中だった。休日にはデュッセルドルフ郊外の美しい溪谷に足を運んだ。美しい溪谷や豊かな森、川のせせらぎ、小さな滝等、大自然の中に神の美しい創造の御業を見て、それを讃美歌にした。神の創造の御業のうちに信仰を見出し、神の救いを確かな約束として讃美する手法はネアンダーの讃美歌の特徴である。デュッセルドルフでのネアンダーは周囲の人々に敬虔主義的な信仰を語り、教会に隠れてフランクフルトのシュペーナーのもとで経験したような敬虔主義の集まりを持ち、信仰の仲間達と共に聖書を読み、祈り、讃美し、聖い生活をするようにとの勧めをしていた。改革派の教会以外で集会を持ち敬虔主義思想の集まりに熱心になる反面、教会の礼拝に飽き足らなくなったネアンダーは次第に礼拝に欠席するようになった。次第に授業も敬虔主義的な内容になり、教会側の不信感を煽ることとなり、教会長老会はネアンダーを査問に掛けた。長老会側の報告書には『ネアンダーの態度は不遜に見えた』とある。ネアンダーの信仰的確信に『改革派教会

も現状の維持ではなく、信仰によって変わらなければならないとの敬虔派の交わりの中で学んだ新しい思想』があったと考えられる。長老会から、今後敬虔主義の集会に出席しない旨の誓約書に署名を求められたネアンダーは、これを拒否して、ネアンダーの解雇は決定的となった。ところが最終的にネアンダーは誓約書に署名することを受け入れた。この文書のことをネアンダー自身は『屈伏調書』と呼んでいる。生きていくためには信じていることを放棄してまで、日々の糧を得なくてはならなかったとの思いからの挫折であり、信じていないものへの屈伏であった。ネアンダーの屈伏調書への署名にもかかわらず、ネアンダーを信用しなくなった教会側は、空席となっていた牧師補の職に校長のネアンダーではなく 2 番目の教師を採用した。失意のうちに日々を送るネアンダーに救いの手を差し伸べたのは、ネアンダーの心の師ウンダーアイクだった。彼はネアンダーをプレーメンのマルティニ教会の 3 番目の説教者として招聘した。マルティニ教会はヴェーザー川のほとりに立つ教会で、もともとは船乗りや漁師のための教会だった。マルティニ教会ではネアンダーは『5 時の説教者』と呼ばれた。宿屋や飯屋で働く下層階級の労働者、漁師のために早朝 5 時の礼拝がネアンダーの担当だった。その様な過酷な環境がネアンダーの健康を奪い去っていった。1 年間の奉職の後、ネアンダーは死去した。30 歳の若さだった。死因は肺結核ともペストとも言われている。牧師として按手されることもなく、結婚もしなかった。

ネアンダーが死んだ 1680 年、彼の讃美歌集が刊行された。この讃美歌集は、それまで詩編歌一辺倒であったカルヴァン改革派教会でも採用され、詩編歌以外の創作讃美歌を歌うように教会が徐々に変わって行った。ネアンダーはその転換期の讃美歌作家である。

この讃美歌集出版の 5 年後に生まれた J・S・Bach はネアンダーの讃美歌集からコラール・カンタータ 86 番、137 番を作曲している。

1500 年代の宗教改革初期の讃美歌は教会の公同性を重んじ、個人的な宗教感情の表出を厳しく抑制した。宗教改革当時の讃美歌は、教会の確立化や教理思想の表現に重点が置かれていた。宗教改革（1517 年）より 100 年後の讃美歌は宗教改革当時とは違った、個人の思想の表現や感情の表現が歌われるようになった。100 年も経つと、教会の公同性よりも個人的な宗教感情表現が宗教詩として定着して、イエスへの愛を直接的に歌う『イエスの歌・Jesuslied』として、より会衆に親しまれ愛され好まれるようになった。その点でもこの讃美歌は 1600 年代の讃美歌の特徴を良く表わしている。

敬虔主義の思想がルター派、カルヴァン改革派、両教会に与えた影響は時代が進むにつれて計り知れない。自分の信仰を証することは、自分の言葉で自分の心を表現することであり、日常的な平易な語彙を使用して、柔軟で自由な表現が用いられる。それが直接的な心情の発露として宗教詩となっていた。

讃美歌に個人の思想の表現や感情の表現が歌われるようになった時代が土台となり、『疾風怒濤・Sturm und Drang』の時代を経て、その後ドイツ文学が一気に花開いていった。

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 230、231 番では、同じ旋律だが題名が違い『Lobe den Herren, den machetogen Konig der Ehren』になっている。

オルガン曲『シューブラー・コラール集』では、**主を褒めまつれ Kommst du nun, Jesu, vom Himmel herunter auf Erden** の題名で書かれている。

1725 年 8 月 19 日の三位一体節後第 12 主日礼拝で初演がなされた『教会カンタータ 137 番・BWV137』の第 2 曲、アルトのアリア。華やかなヴァイオリン独奏の伴奏のもとにアルトがコラールの旋律を喜び歌う。教会カンタータ 137 番の原曲ではアルトのコラールの旋律にも華やかにトリルが施されていて、編曲した際にもそのままの形でオルガンのペダルでコラールの旋律が歌われている。右手がヴァイオリンの装飾された華やかな伴奏、左手に通奏低音が展開され、ペダルにコラールの主旋律が表れている。そのため、コラールの旋律を厳格に守って書かれた前の 5 曲とは雰囲気が大きく異なる終曲となっている。

J・S・Bach, 『教会カンタータ、120a 番、137 番』

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 230、231 番。『Lobe den Herren, den machetogen Konig der Ehren』

同じ旋律で讃美歌 9 番、讃美歌 21 7 番、ルーテル教会讃美歌 172 番、聖公会聖歌集 316 番（歌詞・高田重孝訳）

『真なる神よ、恵みの源・O Gott, du frommer Gott』BWV767

Choralpartiten, Chorale-partitas, コラール・パルティータ第 3 曲

Partite Diverse Sopra il Corale

原詩はヨハン・ヘールマン (Johann Heermann. 1585 ~ 1647)

原旋律の作曲者は不明

原詩はヨハン・ヘールマン (Johann Heermann. 1585 ~ 1647)

ヘールマンは生涯に 400 曲の讃美歌を作った。彼の代表作が『O Gott, du frommer Gott・真の神は恵みの源』(讃美歌 21 545 番)である。この讃美歌は 1630 年『敬虔なる心の音楽・家庭と心の歌・Devoti Musica Cordis. Hauss-und Hertz- Musica』(Breslau, 1630) に発表された。最初は別な旋律が付けられて歌われていたが、1648 年に Braunschweig で刊行された『新公式讃美歌集 New ordentlich Gesangbuch』に現在の格調高く荘厳な旋律付けられて広く歌われるようになった。原旋律の作曲者は不明。旋律は教会旋法のドリア旋法で書かれている。ドリア旋法は現在の二短調に近い調性を持つ教会旋法で、荘厳で厳粛な雰囲気を特徴とする。J・S・Bach がコラール・パルティータ BWV767 で主旋律に使用している。

原詩はヨハン・ヘールマン (Johann Heermann. 1585 ~ 1647)

『真なる神よ、恵みの源・O Gott, du frommer Gott』(BWV767) と『我はどこへ逃れゆきて・Wo sol lich fliehen him 』(BWV646) の作詞者。

ヨハン・ヘールマンは 1585 年、シュレジアの寒村ラウテンに生まれた。シュレジア地方は現ポーランドがドイツとチェコと国境を接するオーデル川上流周辺にある。ヘールマンが生まれた時、両親はすでに 4 人の子供を失っていて、ヘールマンが 5 歳の時、重い病気で危険な状態に陥った。その時母は神に祈り、息子ヨハンが回復したら神にささげることがを誓った。息子は回復して、両親は神に約束したとおり、息子ヨハンのために必死で働き金を工面して学校に行かせた。12 歳の時ヘールマンはヴォーラウの町の薬局で働きながらラテン語学校に通い始めた。生来体が弱かったヘールマンは体調を崩して郷里に戻り、その後は独学で学びを続けた。

17 歳になって健康が回復したヘールマンは、シュレジアのフラウシュタット (現ポーランド Wshowa) で、ルター派の著名な牧師であり詩人であったヴァレリウス・ヘルベルガー (Valerius Herberger・1562 ~ 1627) 家の家庭教師兼牧師秘書になった。優れた牧会者であり詩人であるヘルベルガーの基で青年時代を過ごしたヘールマンは、ヘルベルガーから多大な影響を受けた。ヘルベルガーの勧めによりヘールマンはシュレジアの首都ブレスウラ、さらにブリーグのギムナジウムで学びを続け 22 歳で卒業した。この時期にヘールマンの傑出した詩作の才能が認められ、1608 年・23 歳で皇帝ルドルフ 2 世によって宮廷桂冠詩人に任じられ、ブリーグの宮廷の領主や参事官たちの前で詩を朗読する榮譽に浴した。1609 年・24 歳、ストラスブル大学に入学したが、目の病のために 1 年で退学した。1611 年・26 歳、ケーベンの牧師補として招聘され、翌年 1612 年・27 歳の時、牧師として按手され、ヘールマンは言葉においても信仰においても力ある説教者となっていった。牧師就任の年に、ヘールマンは郷里の市長の娘ドロテアと結婚。桂冠詩人としても牧師としても有能なヘールマンは人々から愛される牧師となり、ヘールマンの教会と牧師館が当時の詩人たち、また思想家たちの集まる場所になっていった。1613 年・28 歳の年、シュレジア全土をペストが襲い、多くの有能な人々の命が失われた。3 年後の 1616 年、ケーベンの町が大火によって多くの建物が灰燼に帰した。1617 年・32 歳の年、深く愛していた妻ドロテアが死去。5 年間の短い結婚生活だった。

ヘールマンは愛する妻を失った深い悲しみと孤独から逃れるためか、すぐに再婚している。2 番目の妻アンナとの間には 4 人の子供に恵まれている。この頃から生来病弱だったヘールマンの体調が思わしくなくなり、気管支喘息に苦しめられるようになる。年を取るにしたがって現代で言う痛風・リュウマチによる激痛が起こるようになり、1634 年・49 歳の時には、説教ができなくなり、ヘールマンが書いた説教原稿を牧師補が代読するようになった。

30 年戦争は断続的に続いていた。1622 年 ~ 23 年 (ヘールマン 37 ~ 38 歳) 皇帝軍の無法者の集団が町を占拠して略奪を繰り返した。1629 年 (ヘールマン 44 歳) リヒテンシュタインの騎兵隊が町を占領、プロテスタント信徒の家に押し入り、主人が改宗するまで家を占領し続けた。1631 年 (ヘールマン 46 歳) 再びペストが襲い、千人を数えた住民の半数の 500 人が命を奪わ

れた。1632年（ヘールマン 47 歳）ヴァレンシュタイン軍が町を占領、残った財産の全てを奪っていった。ヘールマンの時代、死はいつも隣り合わせだった。彼はこのような過酷な生涯の中で多くの説教集や黙想集を出版したが、戦禍と病苦の中で生み出された言葉は、同じ時代同様の苦しみに合っている人々に広く読まれて愛読され、人々に多くの慰めを与え続けていた。ヘールマンは生涯に 400 曲の讃美歌を作った。彼の代表作が『O Gott, du frommer Gott・真の神は恵みの源』（讃美歌 21 545 番）である。この讃美歌は 1630 年『敬虔なる心の音楽・家庭と心の歌・Devoti Musica Cordis. Hauss-und Hertz- Musica』（Breslau, 1630）に発表された。最初は別な旋律が付けられて歌われていたが、1648 年に Braunschweig で刊行された『新公式讃美歌集 New ordentlich Gesangbuch』に現在の格調高く荘厳な旋律付けられて広く歌われるようになった。原旋律の作曲者は不明。

J・S・Bach がコラール・パルティータ BWV767 で主旋律に使用している。

1634 年・53 歳の時、医者から転地療養を勧められケーベンを離れてポーランドのリサ（現レシュノ）へ移った。苦難ばかりの人生だったヘールマンにとって、アンナとの間に生まれた長男・サミュエルは大きな希望だった。サミュエルは一時期カトリック教会のイエズス会に改宗すると言って父を深く悲しませ悩ませたが、最終的にはルター派に留まり大学で学び卒業した。父の才能を受け継いだサミュエルは、父同様に詩作の才能に優れ、皇帝より桂冠詩人の称号を授けられた。しかし、サミュエルは父同様に病弱な体質も受け継いでしまい、若干 22 歳で死去してしまった。父ヘールマンの悲しみと絶望は旧約聖書のヨブの悲しみと同じである。

最晩年のヘールマンは痛風とリュウマチの激痛に苦しまれながら、立つことも座ることもできず、いつも壁に寄り掛かっていた。夜も痛みで熟睡することができない辛い毎日を送った。病との壮絶な戦いの中でもヘールマンは神への信頼を決して失わなかった。

1647 年 2 月 17 日、62 歳になる少し前に、苦難に満ちたこの世での生涯を終えた。後世の人々はヘールマンの苦難に満ちた生涯と彼の揺るぎ無い信仰を思い尊敬の念を持って『シュレジアのヨブ』と呼んでいる。

ヘールマンはマルチン・ルター（Martin Luther 1483~1546）からパウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607~1676）への転換期に位置している。

マルチン・ルター（Martin Luther 1483~1546）の讃美歌は、1500 年始めの宗教改革初期の讃美歌であり教会の公同性を重んじ、個人的な宗教感情の表出を厳しく抑制した。宗教改革当時の讃美歌は、教会の確立化や教理思想の表現に重点が置かれていた。

ヨハン・ヘールマン（Johann Heermann 1585~1647）は時代的にもパウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607~1676）への橋渡しの時代にあたる。ヘールマンの時代から讃美歌は徐々に教会の教理信条を歌うことから脱却して、個人の主観的信仰を歌うもの、敬虔主義的な傾向を帯びようになり『信仰告白の歌』から『信心の歌』へと変わって行き、言葉の使用法も『我ら』から『わたし』もしくは『われ』を主体とした歌に移行し始めた時代だった。

パウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607~1676）の時代になると、宗教改革（1517年）より100年後の讃美歌は宗教改革当時とは違った、個人の思想の表現や感情の表現が歌われるようになった。100年も経つと、教会の公同性よりも個人的な宗教感情表現が宗教詩として定着して、イエスへの愛を直接的に歌う『イエスの歌・Jesuslied』として、より会衆に親しまれ愛され好まれるようになった。その点でもこの讃美歌は1600年代の讃美歌の特徴を良く表わしている。

原旋律の作曲者は不明。

旋律は教会旋法のドリア旋法で書かれている。

ドリア旋法は現在の二短調に近い調性を持つ教会旋法で、荘厳で厳粛な雰囲気の特徴とする。

BWV767で使用されている旋律はJ・S・Bach, 389 Choralgrsangeの中では確認されない。

讃美歌 21 545 番。（歌詞・高田重孝訳）

コラール・パルティータ

パルティータは色々な使われかたをする形式名称だが、BWV767ではコラールに対する変奏曲という意味で使用されている。はじめにコラルの旋律が示され、それが8通りに変奏されている。これはコラルの歌詞が8節までであるためである。

ルターの時代には、オルガンでコラルの伴奏をする習慣はまだなかった。オルガニストは会衆がユニゾン【斉唱】で歌うコラルの間で、同じ旋律を使って変奏曲として演奏をしていた。会衆とオルガンとが交互にコラルを歌う習慣が、パルティータの原点である。

『ライブツィヒ・コラール集・Die Leipzig Choräle, BWV651~668a』と同じように、バッハは、コラールに基づく曲の様々な様式、作曲技法の多様性をこのコラール・パルティータの中で示している。様々の違う技法で書かれていることと、『オルガン小曲集』（BWV631）で書いた作品よりも拡大された手法の作品で、8節のコラルの歌詞の区切りごとに間奏が挿入されていたり、コラルの旋律自体に装飾が加えられていたり、様々な様式で書かれていて、礼拝の中の聖餐式の行われている間に演奏されることを目的としている。

花岡聖子 090・7455・3355

高田重孝 090・5933・4972

花岡聖子・高田重孝

880・0035 宮崎市下北方町横小路 5886・3

0985・25・5467 Fax 0985・22・3628 携帯 090・5933・4972

Email Shige705seiko214@outlook.jp.